

飲邪搏聚

飲邪搏聚者、水飲蓄聚、與^レ邪相搏、是也、大抵其人有_二宿水_一、或因^レ邪而發動、或以^レ誤而勢長、^更有_二得^レ病新成者_一、其停滯多在_二心下胃脘之分_一、然泛慢上下、不_二凝_一結一處、其類凡四、有_下犯_上焦_者_上、有_下壅_中焦_者_上、有_下屬_表分_者、有_下兼_陽虛_者_上、就中節目亦多云、有_下犯_上焦_者_上、何、如_二小青龍湯證_一、是表實、而宿飲被_二邪鼓激_一、以犯_二其肺_一者也、

飲邪搏聚とは、水飲蓄聚と、邪と相搏^うつ、是也、大抵其人宿水有り、或いは邪に因って發動、或いは誤を以て勢長^大、^更に病を得て新しく成る者有り、其停滯^{チヨ}・あまる多く心下胃脘の分に在り、然れども泛^{ひろく}慢^{ひろがる}こと上下、一處に結び凝^{かたま}らず、其類凡そ四、上焦を犯す者有り、中焦を壅^{ふさ}ぐ者有り、表分に屬する者有り、陽虚を兼ねる者有り、就中^{なかんずく}節目^{規則の箇条・こわけ}亦多云、上焦を犯す者有るは、何ぞ、小青龍湯證^{*}の如き、是表實にして、宿飲が邪鼓^{太鼓を打って攻撃する}激しきを被^{こう}むり、以て其肺を犯す者也、

*太陽病中十條「傷寒表不解 心下有水氣 乾嘔發熱而 或渴 或利 或噎 或小便不利 少腹滿或喘者 小青龍湯主之」

柯氏曰、水氣畜_二于心下_一、尚未_二固結_一、故有_二或然之證_一、若誤下、則硬滿而成_二結胸_一矣、

柯氏曰く、水氣を心下に蓄え、尚未だ固く結ばず、故に「或然」の證有り、若し誤下すれば、則ち硬滿して結胸を成す矣、

○徐大椿於_二小柴胡加減法_一、辨_二五味子乾薑同用之理_一、攷吳綬既有_二其說_一、並似^レ未^レ覈、又半夏、湯洗令_二滑盡_一、陶氏有_二詳說_一、曰、不^レ爾戟_二人咽喉_一、又曰、凡方云_二半夏一升_一者、洗畢秤五兩爲^レ正、醫心方、引_二蘇敬_一云、半夏一升、以_二八兩_一爲^レ正、小島尚質曰、以_二藥升_一平^レ之、半夏一升、當_二今二錢三分一釐四絲_一、五兩、當_二今一錢七分六釐_一、陶說似^レ優、

○徐大椿は小柴胡加減法に於いて、五味子乾薑同用^{若効者去人參大棗生姜加五味子乾姜・太陽病中六十八條の加減法の理を辨ず、攷考するに吳綬既に其說^説有り、並未だ覈^{覆われた事実をしらべ明らかにするに似ず、}又半夏、湯洗滑^{やわらかい}盡^{なくな}らむ、陶氏^{陶弘景}詳說^説有り、曰く、爾^然・しからざれば人の咽喉を戟^{ゲキ}・刺激^す、又曰く、凡そ方半夏一升と云う者、洗い畢^{おわり}秤^{はか}るに五兩を正しいと爲す、醫心方、蘇敬^{「新修本草」659年初唐}を引いて云う、半夏一升、八兩を以て正しいと爲す、小島尚質^{なおかた・小島宝素・江戸幕府医官}曰く、藥は升を以て之を平^{ただ}す、半夏一升、當に今二錢三分一釐^リ四絲に當たる、五兩、今一錢七分六釐に當たると、陶說^説優^{すぐれる}のごとし、}

如_二喘家、及桂枝加厚朴杏子湯證_一、是表虚、而飲邪相得者也、俱係_二太陽病有^レ所^レ兼者_一矣、

喘家、及び桂枝加厚朴杏子湯證^{*}の如き、是表虚にして、飲邪相得る者也、俱に太陽病を兼る所有者者に係^つながる矣、

*太陽病中十三條「太陽病、下之微喘、表未解故也、桂枝加厚朴杏子湯主之、」

如_二麻黃湯、大青龍湯、及葛根芩連湯_一、其喘俱爲_二派^派證_一、邪散而喘定、故不^レ在_二此例_一、

麻黄湯、大青龍湯、及び葛根^{黄芩}連湯の如き、其喘俱に派^派・わかれる證を爲す、邪散じて喘定まる、故に此例に在らず、

如_レ麻黄杏仁甘草石膏湯證_一、是表既解、而飲熱迫^レ肺者也、

麻黄杏仁甘草石膏湯證の如き、是表既に解して、飲熱が肺に迫る者也、

*太陽病中三十三條「發汗後 不可更行桂枝湯 汗出而喘 無大熱者 可与麻黄杏仁甘草石膏湯 麻黄 杏仁 甘草石膏 右四味 以水七升 煮麻黄 減煮二升 去上沫 内諸藥 煮取二升 去滓 温服一升 本云 黄耳杯」

成氏以_レ此條_一、與_レ葛根芩連湯_一相對、爲_レ邪氣外甚_一、非^レ是、蓋此汗出、殆裏熱外熏所致耳、攷_レ其方意_一、與_レ小青龍加石膏、越婢加半夏、厚朴麻黄等湯_一、實係_レ一轍_一、則知是飲熱相搏之證矣、注家止爲_レ肺熱_一者、亦未^レ是也、蓋麻黄與_レ石膏_一同用、則相藉開_レ疎水壅_一也、

成氏此條を以て、葛^{黄芩}根^{黄芩}連湯*と相對、邪氣外に甚だしいと爲す、是に非ず、蓋し此汗出、殆ど裏熱外熏が致す所耳、其方意を攷^考するに、**小青龍加石膏、越婢加半夏、厚朴麻^黄等湯と、實に一轍^{一つの路}に係がれば、則ち知る是飲熱相搏の證矣、注家止とどめ肺熱と爲すは、亦未だ是ならず也、蓋し麻^黄を石膏と同用すれば、則ち相藉^{かり}りて水壅^塞を開疎^通す也、

*太陽病中四條「太陽病、桂枝證、醫反下之、利遂不止、脈促者、表未解也、喘而汗出者、葛根黄芩黄連湯主、」

**金匱肺痿癰欬嗽上氣病七

「肺脹欬而上氣、煩燥而喘、脈浮者、心下有水、小青龍加石膏主之、」

「欬而上氣、此爲肺脹、其人喘、目如脫狀、脈浮大者、越婢加半夏湯主、」

「欬而脈浮者、厚朴麻黄湯主之、」

○方後、本云黄耳杯、汪說、難^レ信、或曰、此傳寫有_レ譌脫_一、當_下是本云麻黄湯、今去_レ桂枝_一、加_中石膏_上、

○方後、本云黄^黄耳杯、汪說^說 (注) 黄耳杯、想係置水器也「傷寒論攷注」信じ難い、或^人曰く、此傳寫に譌^いつわり^脱脱^有有り、當に是本云う麻^黄湯、今桂枝を去り、石膏を加えるべし、

如_レ發汗後飲灌而喘_一、是新水所^レ致也、

發汗後飲灌而喘*する如き、是新水の致す所也、

*太陽病中四十六條「發汗後 飲水多必喘 以水灌之亦喘」

汪氏又主_レ麻黄湯_一、亦不^レ確、

汪氏又麻^黄湯主ると、亦確かならず、

有_下壅_一中焦_一者_上、何、此證之水、多自_レ宿昔_一、而有_レ太陽所^レ兼者_一、有_レ裏熱所^レ挾者_一、有_レ表裏無^レ熱者_一、太陽所^レ兼、更^有有_レ差別_一、如_レ桂枝加茯苓朮湯_一、

中焦を壅^ふさぐ者有り、何ぞ、此證の水、多く宿昔^{以前から}より始まりて、太陽兼ねる所の者有り、裏熱挾む所の者有り、表裏に熱無き者有り、太陽兼ねる所、更^更に差別^{分別}有り、桂枝加茯苓朮湯*の如し、

*太陽病上二十八條「服桂枝湯 或下之 仍頭項強痛 翕翕發熱 無汗 心下滿微痛 小便不利者 桂枝去桂加茯苓白朮湯主之 』

今削去桂及白朮、

今桂及び白朮を削去る、

茯苓甘草湯二證、是表有邪、裏有水、然兩者不相搏、唯飲爲邪所動者、而加苓朮證爲重、苓甘證爲輕、

茯苓甘草湯の二證*、是表に邪有り、裏に水有り、然れども兩者相搏うたず、唯飲の邪が爲に動く所の者にして、加苓朮證**重きと爲し、苓甘證輕きと爲す、

*太陽病中四十三條「傷寒、汗出而渴者、五苓散主之、不渴者、茯苓甘草湯主之、」

厥陰病三十條「傷寒厥而心下悸、宜先治水、當服茯苓甘草湯、却治其厥、不爾、水漬入胃、必作利也、」

**太陽病中三十七條「傷寒 若吐 若下後 心下逆滿 氣上衝胸 起則頭眩 脈沈緊 發汗則動經 身為振振搖者 茯苓桂枝白朮甘草湯主之」

此二證俱無煩渴、即裏無熱之徵、其輕重、則玩本文自知、加苓朮條無汗證、明理論、以爲水飲不行、津液內滲之候、

此二證俱に煩渴無し、即ち裏に熱無きの徵、其輕重は、則ち本文を玩なうて自ら知る、加苓朮條汗無き證、明理論成無己著宋代、以て水飲が行めぐらず、津液内滲の候と爲す、

如五苓散證、是表有邪、而熱更入裏、與水相得、或爲下滯、或爲上逆、故外有太陽脈證、內有煩渴、小便不利、及水入則吐等候、然裏重而表輕、故治專利水、而發其汗、

五苓散證の如き、是表に邪有りて、熱更に裏に入る、水と相得、或いは下滯ふさがるを爲し、或いは上逆を爲す、故に外に太陽の脈證有り、内に煩渴、小便不利、及び水入れば則ち吐等候有り、然れども裏重くして表輕し、故に治は水を利するを専らにして、旁・かたわら其汗を發す、

*太陽病中四十一條「太陽病發汗後 大汗出 胃中乾 煩躁不得眠 欲得飲水者 少少與飲之 令胃氣和則癒 若脈浮 小便不利 微熱消渴者 五苓散主之 猪苓十八銖去皮 澤瀉一兩六銖 茯苓十八銖 桂枝半兩去皮 白朮十八銖 右五味 搗爲散 以白飲和服方寸匕 日三服 多飲暖水 汗出癒 如法將息」

太陽病中四十二條「發汗已、脈浮數、煩渴者、五苓散主之、不渴者、茯苓甘草湯主之、」

太陽病中四十四條「中風 發熱六七日不解而煩 有表裏証 渴欲飲水 水入則吐者 名曰水逆 五苓散主之」

太陽病下十四條「病在陽 應以汗解之 反以冷水澀之 若灌之 其熱被劫不得去 彌更益煩 肉上粟起 意欲飲水 反不渴者 服文蛤散 若不差者與五苓散 寒實結胸無熱證者 與三物小陷胸湯」

金匱消渴小便利淋病十三「脈浮小便不利、微熱消渴者、宜利小便、發汗、五苓散主之、」「渴欲飲水、水入則吐者、名曰水逆、五苓散主之、」

脈浮微熱消渴、與脈浮數煩渴、及水逆、自有輕重、然其機相同、故其治則一、或曰、五苓散之證之方、亦猶金匱隨其所得、而攻之之義、柯氏金鑑注意似然、但未了、又先兄曰、澤瀉行水、與茯苓猪苓相類、然五苓散、用朮與二苓、各十八銖、特至澤瀉、多一十二銖者、何、蓋其質輕清、性味俱薄、故多用之、二苓藉其力、更能力行水、此說確當、又嶺南衛生方曰、五苓散用桂、正如小柴胡用人參、大承氣湯用厚朴、備急丸用乾薑之類、欲其剛柔相濟、亦存攻守之意也、故方書謂、五

苓散無^レ桂、及隔^レ年者、俱不^レ可^レ用、近者舗家、有^レ去^レ桂五苓散^一、不^レ知者、爲^レ其所^レ誤^誤、如去^レ桂而入^レ參、却謂^レ之春澤湯^一、治^レ燥渴^一有^レ效、此說非也、本方移治^レ雜病^一、則桂之用、在^レ濇散^一、而能助^レ滲利^一之力^一矣、

脈^脈浮^浮微^微熱^熱消^消渴^渴煩渴多飲「傷寒論入門」は、脈^脈浮^浮數^數煩^煩渴^渴、及び水逆と、自ら輕重有り、然れども其機相同じ、故に其治は則ち一^同、或^人曰く、五苓散の證の方、亦猶金匱其得る所に隨^{したが}いて、之を攻めるの義、柯氏金鑑^{「後纂醫宗金鑑」明代}注意然りに似る、但未だ^了あきらかならず、又先兄^{亡き兄多紀元胤}曰く、澤瀉は水を行き、茯苓猪苓と相類、然れども五苓散、朮を二苓^{茯苓・猪苓}とともに用いる、各十八銖、特に澤瀉^{一兩=二十四銖から三十銖}に至るや、十二銖多いは、何ぞ、蓋し其質輕清、性味俱に薄い、故に之を多く用いる、二苓其力を藉^{かり}、更^更に能く水を行めぐらす、此說確當^{たしかにあたる}、又嶺南衛生方^{李瑒著宋代}曰く、五苓散が桂を用いる、正に小柴胡が人參を用い、大承氣湯が厚朴を用い、金匱三物^{備備急丸}大^大黃[・]乾^乾薑[・]巴^巴豆^が乾^乾薑^{を用いるの類の如し、其剛柔相濟^{濟・たすける}を欲す、亦攻守の意存^{ある}也、故に方書^{醫術の書}謂^う、五苓散桂無し、及び年を隔てる者、俱に用うべからず、近者^{近頃}舗^舗・店^店家、桂を去る五苓散有り、知らざる者、其を爲すを誤とする所、如し桂を去りて參を入れる、却って之を春澤湯*と謂う、燥渴^{燥渴}を治するに効^効有り、此說^説非^非ず也、本方移^{つて}雜病を治すれば、則ち桂の用、濇^濇散^に在^りて、能く滲利^{滲出通利}の力を助ける矣、}

*春澤湯(奇効) 猪苓 茯苓 澤瀉 蒼朮 桂枝 柴胡 人參 麥門冬「実用漢方処方集」薬業時報社

○陶隱居曰、方寸匕者、作^レ匕正方一寸、抄^レ散取^レ不^レ落爲^レ度、校據^レ中平三年慮僂銅尺^一、漢一寸、當^レ今七分六釐^一、又先友狩谷望之曰、白飲、即煮米泔也、齊民要術煮^レ條云、折^レ米白煮取^レ汁、爲^レ白飲^一、此可^レ以證^一、

○陶隱居^{陶弘景}曰く、方寸匕とは、匕^匙・さ^じを作るに正方一寸、散を抄^すく^い取り落さざるを取り度^はかると爲す、校^案ずるに中平三年^{後漢}慮^慮僂^チ・輪^{の類}銅尺に據よると、漢一寸、今七分六釐に当たる、又先^亡友狩谷望之曰く、白飲^{重湯}、即^即ち煮米泔^{カン}・あ^あまい^也、齊民要術煮^レ米^米+宜^宜條云う、米を折^くだ^き白く煮汁を取り、白飲と爲す、此以て證^{法則}とすべし

裏熱所^レ挾者、如^レ猪苓湯證^一、是也、此邪氣入^レ裏、與^レ飲相併、以爲^レ関^一、故滲利^一之品、兼以^レ涼潤^一、且其水併停^レ下焦^一、不^レ特中焦^一、蓋是陽明之類證、以^レ其有^レ水、不^レ爲^レ胃實^一也、

裏熱を挾む所の者、猪苓湯證*の如き、是也、此邪氣裏に入り、飲と相併^あわせ、以て関^たか^いを爲す、故に滲利^{滲出通利}の品、兼ねるに涼潤を以てす、且つ其水併せ下焦に停^とど^まる、特に中焦にあらず、蓋し是陽明の類證、其水有るを以て、胃實と爲さざる也、

*陽明病四十二條「若脈浮 發熱 渴欲飲水 小便不利者 猪苓湯主之」

陽明病四十三條「陽明病 汗出多而渴者 不可与猪苓湯 以汗多胃中燥 猪苓湯復利其小便故也」

少陰病三十九條「少陰病 下利六七日 欬而嘔渴 心煩不得眠者 猪苓湯主之、」

金匱曰、諸病在^レ藏、欲^レ攻^レ之、當^レ隨^レ其所^レ得^レ而攻^レ之、如^レ渴者與^レ猪苓湯^一、餘皆放^レ此、尤氏曰、無^レ形之邪、入結^レ於藏^一、必有^レ所^レ據^レ水血痰食、皆邪藪也、如^レ渴者^一、水與^レ熱得、而熱結在^レ水、故與^レ猪苓湯^一、利^レ其水^一、而熱亦除、若有^レ食者、食與^レ熱得、

而熱結在_レ食、則宜_下承氣湯、下_二其食_一、而熱亦去_上、若無_レ所_レ得、則無_レ形之邪、豈攻法所_二能去_一哉、此解極覈、仍_更表_レ之、又成氏注_{陽明篇本方條}曰、此下後客熱、客_二於下焦_一者也、邪氣自_レ表入_レ裏、客_二於下焦_一、三焦俱帶_レ熱也、云云、蓋此證之水、併停_二中下焦_一、成氏之言、不_レ爲_レ不_レ當、若在_二後世注家_一、專以爲_二下焦之藥_一、然如_二渴心煩不_レ得_レ眠等_一、皆熱在_二中焦_一、而上熏之候、則其說難_レ從、

金匱_{臟腑經絡先後病}一曰*「諸病在藏、欲攻之、當隨其所得而攻之、如渴_渴者與猪苓湯、餘皆放_做此」、尤氏_{尤怡}「傷寒貫珠集」清曰く、形無き邪、入って藏に結ぶ、必ず據る所の水血痰食_{食・たべたもの}有り、皆邪の藪_{やぶ・集まり帰るところ}也、渴_渴者の如き、水と熱と得て、熱結が水に在り、故に猪苓湯を與えて、其水を利して、熱亦除かれる、若し食_{食・たべたもの}有る者、食_食と熱と得て、熱結が食_食に在れば則ち宜しく承氣湯、其食_食を下して、熱亦去るべし、若し得る所無ければ、則ち形無き邪、豈攻法能く去_{のぞくす所}あらん哉_{か・反語}、此解極めて覈_{カク・しらべる}、仍_{なお}更_更に之を表_{あらわす}、又成氏陽明篇本方條に注して曰く、此下後客熱、下焦に客する者也、邪氣表自より裏に入り、下焦に客す、三焦俱に熱を帶_帯びる也、云云、蓋し此證の水、併せて中下焦に停_{とどまる}、成氏の言、當_{あた}らざるを爲さざる、若し後世注家在り、專_{猪苓湯を}ら猪苓湯を以て下焦の藥と爲すは、然り渴_渴心煩眠るを得ず等の如き、皆熱中焦に在りて、上熏の候なれば、則ち其說_説従い難い、

*国訳 一般に諸種の病が体内にあつて、之を治療しようとするときは、その証候複合の現れている所に随つて治療すべきである。例えば、もし渴する場合には猪苓湯を与えるが如くする。其他もみなこの例に倣_{なら}つて治療すべきである。

森田幸門「金匱要略入門」

表裏無_レ熱者、如_二發汗後水藥不_レ得_レ入_レ口、及厥陰茯苓甘草湯證_一、是也、
表裏熱無き者、「發汗後水藥不得入口」*、及び厥陰の茯苓甘草湯證**の如き、是也、

*太陽病中四十七條「發汗後 水藥不得入口為逆_{水逆}」_{傷寒論入門} 若更發汗 必吐下不止」

**厥陰病三十條「傷寒厥而心下悸 宜先治水 当服茯苓甘草湯 却治其厥 不爾 水漬入胃 必作利也」

茯苓 桂枝 甘草 生薑」

太陽病中四十二條「發汗已、脈浮數、煩渴者、五苓散主之、不渴者、茯苓甘草湯主之、」

茯苓甘草湯、一方二用、此桂但取_二溫散_一、猶雜病五苓散之意、又太陽中篇末條證、與_レ此似_レ同、然冒以_二太陽病_一、似_二不_二必表裏無_レ熱者_一、

茯苓甘草湯、一方二用、此桂但_温散_温散を取る、猶雜病_{金匱消渴小便淋病十三}五苓散の意のごとし、又太陽中篇末條*證、此と同じに似る、然れども冒するに太陽病を以てするは、必ず表裏に熱無き者にはあらざるに似る、

*太陽病中百二條「太陽病、小便不利、以飲水多、必心下悸、小便少者、必苦裏急也、」

有_下屬_二表分_一者_上、何、如_二文蛤散證_一、是冷水_水澀_澀灌、水邪鬱_レ表、故主以_二驅散之劑_一、
表分に屬する者有り、何ぞ、文蛤_{コウ}散證*の如き、是冷水_水澀_澀灌_水を直接そそぐ_{傷寒論入門}、水邪表に鬱_{こもる}、故に主るに驅散の劑を以てす、

*太陽病下十四條「病在陽 應以汗解之 反以冷水澀之 若澀之 其熱被劫不得去 彌更益煩 肉上粟起 意欲飲水 反不渴者 服文蛤散 若不差者與五苓散 寒實結胸無熱證者 與三物小陷胸湯」

金匱消渴小便利淋病十三「渴欲飲水不止者、文蛤散主之、 文蛤 」

嘔吐噦下利病十七「吐後渴欲得水而貪水者、文蛤湯主之、 兼主微風脈緊、頭痛

文蛤 麻黃 甘草 生薑 石膏 杏仁 大棗 」

金匱要略述義^{嘔吐噦下利病十七}の按文、按ずるに此條病軽く藥重い、殊^{こと}に相適さず、柯氏此湯を以て、移し太陽下篇文蛤散條に置く、仍^{なお}攷えるに此條、乃ち是文蛤散證、彼此相錯^{まじ}る也、消渴篇曰、渴欲飲水不止者、文蛤散主之、以て互いに徴とすべし矣、但兼主微風脈緊頭痛一句、即ち湯方主る所也、

消渴小便利淋病十三「渴欲飲水不止者、文蛤湯主之、」

此條、從_{柯氏}作_{文蛤湯}、證方始對、且金匱、渴欲^レ得^レ水、而貪^レ飲者、豈發散所^レ宜、一味蛤、自似_{切當}、其方互錯也、

此條^{太陽病下十四條}、柯氏に従い文蛤湯と作る、證方始對、且つ金匱、渴^渴し水を得んと欲して、飲を貪^{むさぼ}る者、豈發散宜しき所、一味蛤、自ら切當^{適切}に似る、其方互いに錯^{まじ}る也、

如_{牡蠣澤瀉散證}、是水氣外溢、其病在^レ下、故治從^レ内、並得^レ病後新成者也、有_{下兼陽虛者上}、何、此其人素虛飲停、今因_{誤治}、陽^更虚、而飲亦動、其證輕重不^レ同、如_{茯苓桂枝甘草大棗湯證}、其病輕、而飲停_{下焦}者也、

牡蠣澤瀉散證*の如き、是水氣外溢^溢、其病が下に在り、故に治は内に従う、並病を得た後新しく成る者也、陽虚を兼ねる者有り、何ぞ、此其人素虚飲停^{とどまる}、今誤治に因り、陽^更に虚して、飲亦動く、其證輕重同じからず、茯苓桂枝甘草大棗湯證**の如き、其病軽くして、飲が下焦に停^{とどまる}者也、

*陰陽易差勞復病四條「大病差後、從腰以下有水氣者、牡蠣澤瀉散主之、」

*^{太陽病中三十五條}「發汗後、其人臍下悸者、欲作奔豚、茯苓桂枝甘草大棗湯主之、」

茯苓半斤 甘草三兩炙 大棗十五枚擘 桂枝四兩去皮

右四味 以甘爛水一斗 先煮茯苓 減二升 內諸藥 煮取三升 去滓 溫服一升日三服 作甘爛水法 取水二斗 置大盆內 以杓揚之 水上有珠子五六千顆相逐 取用之

此方多用^レ桂者、以^レ洩_{泄奔豚氣}也、甘爛水、要取^レ不^レ助_{水勢}、靈樞半夏湯、以_{流水千里以外者八升}、揚^レ之萬遍、取_{其清五升}煮^レ之、其揆一也、

此方多く桂を用いるは、奔豚氣を洩^漉らすを以て也、甘爛水*、要は水勢を助^まさざるを取る、靈樞^{邪客第七十一}「半夏湯、流水千里以外者八升を以て、之を揚ぐる^{こと}萬遍、其清きもの五升を取り之を煮る、」其揆^{やりかた}同也、

*甘爛水の作り方は大きなお盆の中に四合の水を入れ之を杓子で絶え間なく掬い上げ水面に細かい泡がいっぱい浮き上って直ぐには消えないようになったら之で出来上ったとして使用する。甘爛水は陽氣を含むこと多く表を開くはたらきを助ける力あり故に之を用いるとなす。荒木性次「方術説話」

如_{茯苓桂枝朮甘草湯證}、其病重、而飲停_{中焦}者也、

茯苓桂枝朮甘草湯證の如き、其病重くして、飲が中焦に停^{とどまる}者也、

方氏曰、心下逆滿、伏飲上溢、搏_{實於膈}也、氣上衝^レ胸、寒邪上湧、挾^レ飲爲^レ逆也、動^レ經、傷_{動經脈}、振振奮動也、蓋人之經脈、賴_{津液}以滋養、飲之爲^レ物、津液類也、靜則爲^レ養、動則爲^レ病、宜_{制勝}之、云云、尤氏曰、此傷寒邪解而飲發之證、飲停_於

中_二則滿、逆_一于上_一、則氣沖而頭眩、入_一於經_一、則身振振而動遙、金匱云、膈間支飲、其人喘滿、心下痞堅、其脈沈緊、又云、心下有痰飲_一、胸脇支滿、目眩、又云、其人振振身瞤劇、必有_一伏飲_一、是也、發_レ汗則動_レ經者、無_一邪可_レ發而反動_一其經氣_一、故與_一茯苓白朮_一、以蠲_一飲氣_一、桂枝甘草、以生_一陽氣_一、所謂病_一痰飲_一者、當_下以_一溫藥_一和_上之也、愚謂此條止_一脈沈緊_一、卽此湯所_レ主、是若吐若下、胃虛飲動致_レ之、倘_レ更發_レ汗、傷_一其表陽_一、則變爲_レ動_レ經、而身振振遙、是與_一身瞤動振振欲_レ擗_レ地相同、卽眞武所_レ主也、蓋此當_下爲_一兩截_一看_上、稍與_一倒裝法_一類似、又錢氏注、傷寒本當_下以_一麻黃_一汗解_上云云、然此證、誤汗之變、遽至_レ動_レ經、則其本爲_一桂枝證_一、亦未_レ可_レ知、蓋傷寒二字、不_レ須_一拘執_一、又其方專取_一利_レ水以健_レ胃、與_一甘棗湯_一有_一小異_一、金鑑以_一中焦下焦_一爲_レ辨、其說爲_レ協、

方氏^{方有執「傷寒論條辨」}明曰く、心下逆滿、伏飲上に溢^{溢・あふれ}、膈に搏實^{うちみつる}する也、氣上って胸を衝く、寒邪上に湧^{わく}、飲を挟み逆を爲す也、經を動かす、經脈を傷り動し、振振奮^{ふるい}動く也、蓋し人の經脈、津液に頼^{頼・たより}りて以て滋養、飲の物爲や、津液類也、靜靜は則ち養を爲し、動は則ち病を爲す、宜しく制して之に勝つべし、云云、尤氏^{尤怡「傷寒貫珠集」}清曰く、此傷寒邪解して飲發するの證、飲が中に停まれば則ち滿、上に逆すれば則ち氣沖^{のぼり}りて頭眩、經に入れば、則ち身振振して動遙^遙、金匱云「膈間支飲、其人喘滿、心下痞堅、其脈沈緊、又云、心下有痰飲、胸脇支滿、目眩、」又云「其人振振身瞤劇、必有伏飲^{潜伏せる痰飲}」是也、汗を發すれば則ち經を動かすとは、邪に發すべき無くて反って其經氣を動かす、故に茯苓白朮を與え、以て飲氣を蠲^{ケン・除去}す、桂枝甘草、以て陽氣を生む、謂う所の痰飲を病む者、當に溫^温藥を以て之を和すべき也と、愚謂う此條脈^脈沈緊に止どまるは、卽^即ち此湯主る所、是若吐若下、胃虛飲動之を致す、倘^{もし}更^更に汗を發し、其表陽を傷^{やぶ}れば、則ち變じて經を動かすと爲して、身振振遙、是身瞤動^{筋肉が痙攣的に収縮}「傷寒論入門」振振^振動^動地に擗^{たお}れんと欲すと相同、卽^即ち眞武主る所也、蓋し此當に兩に截^{わた}ると爲すを見るべし、稍倒裝法と類似すると、又錢氏注、傷寒本當に麻黃^黄を以て汗解とすべし云云、然れども此證、誤汗の變、遽^{にわか}に經を動かすに至れば、則ち其本桂枝證と爲す、亦未だ知るべからず、蓋し傷寒二字、須からく拘執すべからざるべしと、又其方專ら利水を取り以て胃を健^{すこ}やかにす、甘棗湯と小異有り、金鑑^{御纂醫宗金鑑・清}は中焦下焦を以て辨と爲す、其說^説協^かなうと爲す、

* 太陽病中五十四條「太陽病 發汗 汗出不解 其人仍發熱 心下悸 頭眩 身瞤動 振振欲擗地者 眞武湯主之」

太陽病中三十七條「傷寒 若吐 若下後 心下逆滿 氣上衝胸 起則頭眩 脈沈緊 發汗則動經 身為振振搖者 茯苓桂枝白朮甘草湯主之 茯苓 桂枝 白朮 甘草」

傷寒論輯義・太陽病中三十七條・案金匱要略痰飲篇曰、心下有痰飲、胸脇支滿、目眩、苓桂朮甘湯主之、乃知此條、心下逆滿、氣上衝胸、起則頭眩者、陽虛痰飲所致也、

金匱痰飲欬病十二「心下有痰飲、胸脇支滿、目眩、苓桂朮甘湯主之。」

「膈間支飲、其人喘滿、心下痞堅、其脈沈緊、得之數十日、醫吐下之不愈、木防已湯主之」

「其人振振身瞤劇、必有伏飲。」

如_二太陽篇眞武湯證_一、其病最重、而與_二朮甘證_一、其機相近者也、

太陽篇眞武湯證の如き、其病最も重い、而^{しか}して^{茶桂}朮甘證と、其機相近き者也、

此條、唯尤氏以爲^兼水飲_一、然其說迂而不^切、愚謂此證虛陽外越、故發熱陽虛飲動、故心下悸、飲阻_二清陽_一、故頭眩、經脈衰弱、爲^飲被^動、故身^潤動、振振欲^擗地、其用_二此方_一者、以扶^陽利^水也、此身^潤動、與_二大青龍湯肉^潤_一殆異矣、

此條、唯尤氏以て水飲を兼ねると爲す、然れども其說^迂まわりくどくて切^するといならず、愚謂此證虛陽外越、故に發熱陽虛飲動、故に心下悸、飲が清陽を阻^はむ、故に頭眩、經脈^衰衰弱、飲が爲に動を被^こむる、故に身^潤動、振振地に擗^たおれんと欲する、其此方を用いる者、以て陽を扶^たすけ水を利する也、此身^潤動、大青龍湯肉^潤と殆^おそらく異なる矣、

如_二傷寒吐下後發^汗虛煩脈甚微、久而成_レ痿、亦是朮甘湯證、而經^日失^治者也、

*傷寒吐下後發汗虛煩脈甚微、久しくして痿と成る如き、亦是^{茶桂}朮甘湯證にして、日を經て治を失する者也、

*太陽病下三十二條「傷寒吐下後 發汗 虛煩 脈甚微 八九日 心下痞鞭 脇下痛 氣上衝咽喉 眩冒 經脈動惕者 經脈（臨床的には筋肉でも神経でも之に該当する）がびくびくと動くもの・龍野一雄「国訳傷寒論」久而成痿」

方氏曰、此申_二茶桂朮甘湯_一、而復言_下失_二於不_レ治則致^廢之意_上、彼條脈沈緊、以^未發^汗言也、此條脈甚微、以_二已發_レ汗言也、經脈動、即動經之變文、惕、即振振搖搖也、大抵兩相^互發明之詞、久、言_二既經_二八九日_一、若猶不^得解、而^更失_二於不_レ治、則津液内^亾、溼淫外^漬、必致_二兩足痿軟_一、而不_二相及_一也、尤氏曰、心下痞鞭、脇下痛、氣上沖_二咽喉_一、眩冒者、邪氣搏^飲、内聚而上逆也、内聚者、不^能四布_一、上逆者、無_二以逮_レ下、夫經脈者、資_二血液_一以爲^用者也、汗吐下後、血液所^存幾何、而復搏結爲^飲、飲不^能布散_二諸經_一、今經脈既失_二浸潤於前_一、又不^能長_二養於後_一、必將_二筋乾急而攣_一、或樞折脛縱、而不^任地、如_二内經所^云脈痿筋痿之證_一也、故曰、久而成^痿、兩說並覺_二詳密_一、蓋虛煩是陽虛所^致、與_二建中之煩_一相近、而與_二樞歧之虛煩_一不^同、

方氏曰く、此^{太陽病下三十二條}茶桂朮甘湯を申^のべて、復た治せざるに失^{あや}まれば則ち廢^廢を致すの意を言う、彼條^{太陽病中三十七條}脈^脈沈緊、未だ汗を發せざるを以て言う也、此條^{太陽病下三十二條}脈甚微、汗を發するを以ての言也、經脈動、即ち動經の變文、惕^{テキ}・恐れて安らかでない、即ち振振搖搖也、大抵兩相^互更に互に發明^明らかにするの詞、久、既に八九日を経るを言う、若し猶解を得ずして、^更に治せざるに失^{あや}まれば、則ち津液内^亾、溼^濕・淫^淫みだれる外^漬ひたる、必ず兩足痿軟^軟・軟弱にして、相及ばざるを致す也、尤氏曰く、心下痞鞭、脇下痛、氣上つて咽喉に沖^のぼる、眩冒とは、邪氣が飲を搏^うち、内聚して上逆する也、内聚とは、四布^四方に伸び広がる能^わず、上逆とは、以て下に逮^およぶ無し、夫經脈とは、血液を資^たくわえ以て用を爲す者也、汗吐下後、血液存する所幾何^{キカ}・どれほど、而^{しか}して復搏結が飲を爲し諸經に布散する能^わず、今經脈既に浸潤前に失す、又後を長養する能^わず、必ず將に筋乾急して攣^攣すべし、或いは樞折脛縱^縦・ほしいままにして、地に任^まかせず、内經云う所の脈痿筋痿の證の如き也、故に曰く、久しくして痿を成す、兩說^説並詳密を覺える、蓋し虚煩是陽虚の致す所、建中の煩と相近くして、樞歧の虚煩と同じからず、

○校苓桂二湯證、注家多單爲「陽虛」、輯義援「金匱」、以確「其爲「淡飲」、今又以「眞武證」、爲「同一情機」、特似「牽湊」、然反覆申熟、理不^レ得^レ不^レ然也、

○校案ずるに苓桂二湯證太陽病中三十七條と金匱痰飲欬嗽病十二條、注家多く單に陽虛と爲す、輯義は金匱を援ひき、以て其淡飲爲るを確かめる、今又眞武證を以て、同一情機と爲す、特に牽^ひき湊^あつまるに似る、然り反覆申熟シンジユク・いくども細かく調べる、理然らざるを得ざる也、

2010/ 6/ 2